

中国現代イスラームの現状と特徴

敏 俊卿

要旨

イスラームは西暦7世紀中葉、ムスリムの東方流入とともに中国に伝わり、以来1300年以上の発展を経て、現代中国の五大宗教の一つとなった。イスラームは、中国における現地化の過程で多くの宗派とその分派に分かれた。全体として、現在、中国本土では主としてカディーム派、イフワーン派、西道堂派、サラフィーヤ派の4つの教派と、フフィー教団、ジャフリーヤ教団、カーディリー教団、クブラヴィー教団の4つの門宦が形成され、新疆ウイグル自治区では主としてイシャーン派、スンニ派、シーア派等が形成されている。中国のイスラーム文化は各地域・各ムスリム民族によって多少の違いがあるが、イスラームの信仰体系は完全な形で存続し、今に至るまでなお中国のムスリム民族文化の中核を成している。1990年代以降、改革開放政策が浸透し、中国の東南部沿海地域が中国全土、ひいてはアジア地域における商業貿易地としての地位を確立するにしがたい、国内外から多くのムスリムが続々と東南部沿海地域にやって来て商業活動を行うようになった。彼らの出現は、中国東部都市におけるイスラーム文化の生態と社会生活に影響と変化を及ぼしている。イスラームが内包する豊かな調和の理念は、中国の広範なムスリムの理論的指針と行動規範となっているだけでなく、現在ムスリム地区と中国が調和のとれた社会を構築する上での重要な思想的リソースともなっている。

キーワード：中国、イスラーム

イスラームは唐宋時代に中国へ伝入したのち、1300年以上の発展を経て現代中国の五大宗教（仏教、道教、イスラーム、カトリック教、プロテスタント）の一つとなった。中国の歴史上、イスラームは様々な名称で歴史書に記述されている。唐王朝では「大食法」、宋王朝では「大食教度」、元王朝では「回回法」「回回大食法」、明王朝では「回回教門、回回教、天方教、清真教、穆罕默德教」¹⁾、清王朝から中華民国期には「回教」と記されている。新中国成立後の1956年7月、中華人民共和国国務院は「イスラームの名称問題に関する国務院通達」を発表した。通達では「イスラームは国際性を有する宗教であり、イスラームという名称は国際社会で通用する名称である。今後イスラームについて『回教』という名称を使用してはならず、『イスラーム』と称するべきである」としている。こうして、イスラームは中国本土における統一名称となった。香港、マカ

オ、台湾では、今なお「回教」の名称を使用している。

1. 中国現代イスラームの概要

(1) 中国ムスリムの人口と分布

2000年の中国人口調査のデータによると、全国のムスリム人口は20,320,580人で、回族、ウイグル族、カザフ族、トンシャン族、キルギス族、サラール族、タジク族、ウズベク族、バオアン族、タタール族の10民族が存在する²⁾ (表1参照)。人口の自然増加率から、2010年現在、中国のムスリム人口は2,300万人余りに達するとみられる。また、漢族、モンゴル族、チベット族、白族、タイ族等の民族の中にも少数ではあるがイスラームを信仰する集団が存在する。中国のムスリムの主要分布省区は、新疆、甘肅、寧夏、河南、青海、河北、山東、雲南であり、また人数にばらつきはあるが全国的にムスリムが分布している (表2参照)。

表1：中国ムスリムの民族分布エリア、使用言語・文字、人口統計表

| 民 族 | 主要分布エリア | 言語、文字 | 人口 (人) (2000) |
|--------|---|--------------|------------------|
| 回 族 | 寧夏、甘肅、青海、河南、河北、山東、雲南、新疆、北京、天津、上海、内モンゴルおよび東北、西南、華南等。 | 漢語、漢字 | 9,816,805 |
| ウイグル族 | 新疆 | ウイグル語、ウイグル文字 | 8,399,393 |
| カザフ族 | 新疆、甘肅、青海 | カザフ語、カザフ文字 | 1,250,458 |
| トンシャン族 | 甘肅、新疆 | トンシャン語、漢字 | 513,805 |
| キルギス族 | 新疆 | キルギス語、ウイグル文字 | 160,823 |
| タジク族 | 新疆 | タジク語、ウイグル文字 | 104,503 |
| ウズベク族 | 新疆 | ウズベク語、ウイグル文字 | 41,028 |
| サラール族 | 青海、甘肅 | サラール語、漢字 | 12,370 |
| バオアン族 | 甘肅、青海、新疆 | バオアン語、漢字 | 16,505 |
| タタール族 | 新疆 | タタール語、ウイグル文字 | 4,890 |

表2：各省都市ムスリム人口と対総人口比³⁾

| 地名 | ムスリム人口 (万人) | 当地総人口に占める割合 (%) | |
|-----------|-------------|-----------------|---------------------------------------|
| 1. 新疆 | 1070.6 | 57.99 | この12省市区のムスリム人口の、全国ムスリム人口に占める割合は92.44% |
| 2. 寧夏 | 186.5 | 33.99 | |
| 3. 甘肅 | 166.9 | 6.64 | |
| 4. 河南 | 95.8 | 1.05 | |
| 5. 青海 | 84.4 | 17.51 | |
| 6. 雲南 | 64.5 | 1.52 | |
| 7. 河北 | 54.5 | 0.82 | |
| 8. 山東 | 50 | 0.55 | |
| 9. 安徽 | 33.9 | 0.58 | |
| 10. 遼寧 | 26.7 | 0.64 | |
| 11. 北京 | 24 | 1.76 | |
| 12. 内モンゴル | 21.1 | 0.91 | |
| 13. 天津 | 17.4 | 0.2以下 | この19省市区のムスリム人口の、全国ムスリム人口に占める割合は7.52% |
| 14. 貴州 | 17.1 | 0.48 | |
| 15. 陝西 | 14.1 | 0.4 | |
| 16. 江蘇 | 13.5 | 0.2以下 | |
| 17. 吉林 | 12.7 | 0.2以下 | |
| 18. 黒竜江 | 12.7 | 0.35 | |
| 19. 四川 | 11.2 | 0.2以下 | |
| 20. 福建 | 11.1 | 0.32 | |
| 21. 湖南 | 10.6 | 0.2以下 | |
| 22. 湖北 | 7.9 | 0.2以下 | |
| 23. 山西 | 6.3 | 0.2以下 | |
| 24. 上海 | 5.9 | 0.36 | |
| 25. 広西 | 3.4 | 0.2以下 | |
| 26. 広東 | 2.9 | 0.2以下 | |
| 27. 浙江 | 2.1 | 0.2以下 | |
| 28. 重慶 | 1.2 | 0.2以下 | |
| 29. 江西 | 1.1 | 0.2以下 | |
| 30. チベット | 1.0 | 0.39 | |
| 31. 海南 | 0.9 | 0.2以下 | |

表1、2からわかるように、中国のムスリムは広義的には地域と文化類型上、回族を主とする本土ムスリムとウイグル族を主とする新疆ムスリムとに分けられ、その人口分布は依然として総体的に伝統的な意味での「大分散、小集住」の構造を保持している。ただし、中国のほとんどの都市にムスリムの人口分布があり、それは社会文化的な多元性と複雑性を反映しているという点で注意が必要である。

(2) イスラーム団体とモスク

1. イスラーム団体

1953年5月、北京にてイスラームの全国的宗教団体——中国イスラーム協会が設立された。その後、29の省、直轄市レベルのイスラーム協会組織、186の市レベルのイスラーム協会組織、291の縣市レベルのイスラーム協会組織が各地に相次いで設立された⁴⁾。これらイスラーム団体の主な任務としては、イスラームの教務活動、イスラーム教育、イスラームの指導人材の育成、イスラームの歴史文化遺産の発掘と整理、イスラームの学術文化研究、経書や書籍雑誌の編集出版、全国各民族ムスリムたちの聖地マッカへの巡礼義務履行のための組織化、中国ムスリム代表としての各国ムスリムとイスラーム組織との友好交流促進が挙げられる。

2. モスク

中国のモスク建築は、その創建時期と分布地域により、3つの建築様式として分類される。1. 唐、宋、元時代のアラブ式のモスク建築。広州懐聖寺、泉州清浄寺、杭州鳳凰寺、揚州仙鶴寺など、唐宋時代に建造された古寺がこれにあたる。2. 明清以降の、回族地区にある中国殿堂様式によるモスク建築。明清時代のモスク、とりわけ本土のモスクは次第に中国の古典式建築からの影響を強く受けるようになり、建築様式及び構成もかなり大きな変貌を遂げた。全体の構成として、礼拝殿とミナレット以外に、講堂や沐浴室などもつけ加えられた。3. 新疆地区における、西アジア・中央アジアの特徴を具えたモスク建築。その建築様式はアラブ・イスラームの特色をより色濃く残しており、木材や土レンガ、焼成レンガ、瑠璃レンガを多用したドーム型の屋根または平らな屋根の建築で、開放的な殿堂と閉鎖的な殿堂を融合した方式がとられている。現在、中国西北部の甘肅、寧夏、青海地区の回族が新築するモスクも、アラブ式の半球形丸屋根型の建築様式である。その他、各地のモスク建築は、その土地の民族の建築芸術の要素を吸収している。例えばラサの清真大寺は、建築構造全体と細部の装飾に彩画がほどこされており、主殿とミナレット外側の石レンガと色彩、描線、模様には当地のチベット式建築芸術の手法が使われている。また雲南西双版纳地区の回族モスクの建築には、タ

イ族の竹楼形式が採用されている。

現在、全国には34,000以上のモスクが存在する。そのうちの24,000以上が新疆にあり、ムスリム約400人に対してひとつのモスクがあることになる。南新疆ではひとつの自然村に少なくともひとつのモスクがあり、行政村には基本的にひとつ金曜礼拝を行うモスクが存在する⁵⁾。

(3) イスラームの教派

イスラームそれ自身の発展と世界各地への広範な伝播にしたがい、異なる社会思潮・学説や政治利益を代表する集団が宗派との名称を用いて生まれ、活動した。イスラームの中国現地化の過程においても、同様に多くの宗派とその分派が生まれた。明末清初には、イスラーム・スーフィー派の思想学説が新疆を経て本土に伝わった。新疆ではイシャーン派が形成され、本土のスーフィー派の教階制度と西北ムスリム地区の封建宗法の家族制度が融合して、次第に門宦制度が形成された。門宦は宗派の組織形態の一種であるとともに宗教上層の「名門」でもあり、およそ3、40の大小の門宦が相次いで生まれた。また中国本土では、中国文化によるイスラーム学理の発揚を提唱する西道堂派が生まれた。そのため、全体的にみると、現在、中国本土では主としてカディーム派、イフワーン派、西道堂派、サラフィーヤ派の4つの教派と、フフィー教団、ジャフリーヤ教団、カーディリー教団、クブラヴィー教団の4つの門宦が形成され、新疆ウイグル自治区では主としてイシャーン派、スンニ派、シーア派等が形成されている。

2. 中国現代イスラームの総体的な特徴

(1) イスラームの信仰はムスリム民族の文化的中核

イスラームの現地化思想の形成とともに、イスラームと特定の民族との間に密接なつながりが生まれた。こうしたつながりは、総体的に二つの属性に現れている。本土では、イスラームの現地化の過程で、イスラーム文化と漢文化が相互に融合した結果、直接的に回族、トンシャン族、サラール族、バオアン族の4つの新たな民族共同体が形成された。一方、新疆では、イスラーム文化がテュルク文化と融合し、テュルク文化を吸収する長い過程の中で、ウイグル族、カザフ族、ウズベク族、キルギス族、タタール族、タジク族が次第にイスラーム化していった。つまり、中国イスラームの現地化は、イスラーム文化と異なる文化との相互受容、吸収、融合の過程であり、中国ムスリムの民族化の進行過程と深く関わっている。

本土の4つのムスリム民族を見ると、イスラーム信仰は民族の形成と発展において、

決定的な文化の内なる力であることがわかる。まさにこのために、トンシャン族、サラール族、バオアン族は歴史上「東郷回」「撒拉回」「保安回」と呼ばれ、これら民族の人々もこの呼称を受け入れた。イスラーム信仰が結合の中核となって生まれた本土のムスリム民族にとって、イスラームの信仰と文化は、彼らの集団としてのアイデンティティの根幹なのである。

イスラームが中国社会に入ってきたら、少なくとも回族、トンシャン族、サラール族、バオアン族等のムスリム民族が生まれることはなかったと言えよう。そしてこれら4つのムスリム民族が形成されたのは、イスラームの中国社会の特定区域・文化環境の中での現地化による結果であるとも言えよう。トンシャン族、サラール族、バオアン族はそれぞれ特殊な形成の過程をたどり、自民族の言葉を持つが、これら3民族のイスラーム文化はいずれも漢文化の影響を強く受けている。漢語と漢字を用いるのはこれらの民族の人々にあまねく見られる現象である。同時に、イスラーム信仰と文化は、これらの集団が特定の歴史背景の中で民族共同体を形成する際の「所与のもの」と「内在的原動力」となった。またそれは、ムスリム民族が「他の集団」と交流する中で他との境界にうち建てた精神的原点であり集団アイデンティティの根源である。

新疆地区のイスラーム化の開始とともに、イスラームはこの地区において顕著な民族的特色と地域的特色を具えるようになった。新疆の6つのムスリム民族はすべてテュルク語族に属するが、それぞれ独自の文化体系を作り上げてきたため、イスラーム化の過程もそれぞれ異なる特色を持っている。新疆のイスラームにも現地化と民族化の過程において多様化の特徴が現れている。古代のウイグル族、カザフ族、キルギス族などはイスラーム化以前、シャーマニズムなどを信奉していた。したがってそのイスラーム化の過程はすなわちイスラームとシャーマニズムなどとの衝突と統合の過程であった。こうした衝突と統合は新疆の宗教的・地方性と民族性の特徴を体現している。またそれは、イスラームを含む外来宗教が長きにわたって流行し発展することのできた根本的要因でもある。

本土と新疆という二大イスラーム文化体系から見ても、あるいは具体的に各ムスリム民族のイスラーム文化の特徴を見ても、イスラームが伝播の過程で必然的に辿った現地化のプロセス、およびそれにより生まれた多様化された形態が反映されている。しかし強調すべきは、イスラームは現地化の過程において、自らの信仰体系をいっさい変化させておらず、本土の文化に合わせ、表現方式のみを変えた点である。すなわち、中国のイスラーム文化は地域ごと、ムスリム民族ごとに多少の違いはあるものの、イスラームの信仰体系は一貫して完全な形で存続し、今なお中国ムスリム文化の中核となっているのである。

(2) 流動するムスリムは中国東部都市のイスラーム文化の生態と社会生活に影響と変化をもたらしている

1990年代以降、改革開放政策が浸透し、中国の東南部沿海地域が中国全土、ひいてはアジア地域における商業貿易地としての地位を確立するにしたがい、国内外から多くのムスリムが続々と東南部沿海地域にやって来て商業活動を行うようになった。彼らの到来により、この地域の商業貿易の往来が活性化し、さらには当地のイスラーム文化の復興に新しい血が注ぎ込まれた。

国内外から続々と東南部沿海地域へやって来たムスリムたちは、久しく埃をかぶっていた当地のモスクの門を開き、そして抑揚のある美しい礼拝の呼びかけ（アザーン）を唱え、一日5回の礼拝を始めた。こうしてモスクは昔の賑わいと温もりを取り戻した。金曜の集団礼拝のたびにモスクは人でごった返している。2011年8月に筆者が調査したところによると、東南部沿海地域の開放された全てのモスクにおける金曜の集団礼拝日の参拝人数は400人から7,000人と様々で、断食明けの祭りと犠牲祭に広州の先賢古墓モスクや義烏モスクなどに礼拝した人数は20,000人を超え、大部分のモスクで2,000人以上だった。

中国社会科学院発表の『2009年中国宗教報告』によれば、2008年時点で、中国には約300万の流動ムスリム人口が存在する⁶⁾。2005年統計当時のムスリム流動人口200万という数字に比べ大幅に増加している。調査によると、江蘇省では、原住のムスリム人口は省全体で17万人（2000年）であったのが、近年、毎年2万人のペースで増加し、南京市だけでも、2009年に暫居証を取得した外来ムスリムは5.3万人以上にのぼった。上海市では原住ムスリム人口は6万前後だったが、現在は16万に達している。福建省の地元ムスリムはわずか3,000人余りだが、外来ムスリムは15,000人以上となり、主に福州、泉州、アモイ、南平などに分布している。中国国内の流動ムスリム人口のうち、回族の占める割合は89.8%、ウイグル族は4.8%で、サラル族、トンシャン族およびバオアン族は合わせて3.9%である。この流動人口は大部分が西北地域から来たものである。甘肅、青海、新疆および寧夏出身のムスリムが占める割合は、全流動ムスリムの81.3%にのぼる⁷⁾。

2010年8月、筆者は福建省福州市・泉州市・アモイ市、浙江省杭州市・義烏市、上海市、江蘇省南京市・揚州市・蘇州市などのモスクを訪れたが、いつ行っても多くの国内外のムスリムが礼拝に来ていた。彼らは喜びに満ちた様子でモスクを訪れて礼拝し、その後は都市の広大な人の海の中へ消えていった。ムスリムの人口は地域ごとに数に開きがあるが、東南部沿海地域においては多様性がやはりイスラーム文化生態の基本的な色調となっている。ムスリム流動人口の出現は、中国東部都市のイスラーム文化の生態と

社会生活に影響と変化をもたらしているといえる。

(3) イスラームは現代中国の社会の調和のために積極的な精神的リソースを提供している

グローバル化の波の中、人類には自身の文化や伝統の中から現代的価値のある思想的リソースや、社会の発展に適応する内在的潜在力を掘り起こすこと、そしてそれに対して人類の発展と社会の調和に役立つ解釈を行うことにより、各民族の現代化のために積極的かつ健全な精神的原動力と心理的な支えを提供することが求められている。

イスラームは7世紀中葉に中国に伝来したのち、長い歴史的発展過程の中で、中華文化に受け入れられ吸収されて、その有機的な構成要素となった。イスラーム文化もまた中国の社会構造への適応の過程で、絶えず適応と自己改革を重ねてきた。それに内包される豊かな調和の理念は、中国の広範なムスリムの理論的指針と行動規範となっているだけでなく、現在ムスリム地区と中国が調和のとれた社会を構築する上での重要な思想的リソースともなっている。

イスラーム文化の協調理念には、強い全体論的な世界観がある。天、地、人のすべてのレベルを包含し、主を敬い人を愛し互いに助け合う、精神と物質は相矛盾せず、人と自我、人と人、人と自然、人と社会は調和できる、というのがそれである。イスラーム文化は調和のとれた社会と世界の構築を目指し、民族や文化、宗教の違いを越えて互いに尊重しあい、調和して共存し、平和的対話を行うことを提唱し、同時に民族主義や宗教的極端主義、文化的覇権主義、また文明の衝突論など社会と世界の調和を損なうすべての有害な要素に反対する。近年、中国イスラーム界はイスラームの経典や規律等の解釈を全面的に推し進め、自身の文化や伝統の中から現代的価値のある思想的リソースや、社会の発展に適応する内在的潜在力を掘り起こすこと、そしてそれに対して人類の発展と社会の調和に役立つ解釈を行うことにより、各民族の現代化のために積極的かつ健全な精神的原動力と心理的な支えを提供し、これによって宗教と社会、国家の統一を実現した。イスラームは中国社会の精神文明構築のためにプラスとなっているだけでなく、すでにその重要な構成要素となっているとも言えよう。

3. 結論

人類の文化は、自身の社会の発展もしくは異文化との接触によって常に一種の動的な変遷の過程にある。これは文化の発展における法則性といえる現象である。人類の文化の重要な構成要素としての宗教文化も同様に、その伝播と発展において変遷するという特色を有している。すなわちそれは、伝播した地域の文化に一定の影響を与えるだけ

でなく、それ自身も同様にその地の文化形態を受け入れ現地化の過程を経ることによって自身の存続と継続を追求するのである。イスラームは、一種の宗教信仰、意識形態、文化体系として世界各地に伝わり、その地の伝統文化と相互に影響し合い融合した。その結果、双方向に影響を与え合うという状況が生まれた。イスラーム文化は、一方で、異なる歴史的条件下、多くの国家や民族の社会発展、政治構造、経済形態、文化スタイル、倫理道德、生活様式等に対して程度の差こそあれ確実に影響を及ぼしつつ、また一方では、自身の核となる教義、基本的な修練、価値基準を堅持しつつ、自身以外の文化から自身の発展に有益な要素と表現方式を吸収し、適宜順応し、その地の社会文化環境に適応していった。イスラーム文化の中国への伝播はこのような道筋を経て展開されていったのである。

グローバル化と近代化が進む今、イスラームは単にムスリム民族の精神生活における中核であるだけでなく、特定の近代化のパターンを選択するための潜在的な文化の原動力でもある。イスラームの価値志向のうち、平和、公正、平等、調和等の理念は、現実的にも理想上でも永遠に追求されるものである。また同時に、よく慈善を行い、互いに助け合い団結し、努力奮闘し、今世来世の幸せを願うというイスラーム精神の発揚は、その地の中国ムスリムの大衆に、自身の生活の質を向上させ、民族、地方社会および国家等の発展に貢献する上で、絶えることのない精神的原動力を与えるものである。ムスリム社会としては、一方では自身の保守性、閉鎖性、排他性や内部の派閥争い等、発展を妨げる限界性について批判と自己反省を行う必要があり、また一方では、イスラームが人類社会の発展に有益な道德倫理であり、価値を求め現実を追求するものであることをより強くアピールし、大衆のイスラームに対する認識を、客観的で公正なものに高め、中国イスラームの健全な発展を促す必要がある。

参考文献

1. 楊懷中、余振貴主編『伊斯蘭与中国文化（イスラームと中国文化）』、寧夏人民出版社、1995年。
2. 中国伊斯蘭百科全書編集委員会編『中国伊斯蘭百科全書（中国イスラーム百科全書）』、四川辞書出版社、2007年。
3. 楊文炯『互動・調適与重構（相互作用・適応と再構築）』、民族出版社、2007年。
4. 馬強『流動的精神社区——人類学視野下的広州穆斯林哲瑪提研究（流動する精神コミュニティ——人類学的視野からみた広州ムスリムジャマアティ研究）』、中国社会科学出版社、2007年。
5. 『中国宗教報告』（2009年）、社会科学文献出版社、2009年。

6. 中国伊斯蘭教協會編『中国伊斯蘭教簡志（中国イスラーム簡志）』、宗教文化出版社、2011年4月、第4頁。
7. 季芳桐「東部城市流動穆斯林人口の結構特征与就業狀況研究——以天津、上海、南京、深圳四城市為考察点（東部都市流動ムスリム人口の構成特徴と就業狀況の研究——天津、上海、南京、深圳の4都市を調査点として）」、『西北第二民族学院学報（哲学社会科学版）』、2008年第4期。
8. 楊宗徳「中国穆斯林当前人口研究（中国ムスリムの現在の人口研究）」、『済南穆斯林（済南ムスリム）』2010年第2期掲載。

注

- 1) 中国伊斯蘭教協會編『中国伊斯蘭教簡志（中国イスラーム簡志）』、宗教文化出版社、2011年4月、第4頁。
- 2) 中国伊斯蘭教協會編『中国伊斯蘭教簡志（中国イスラーム簡志）』、宗教文化出版社、2011年4月、第10頁。
- 3) 楊宗徳「中国穆斯林当前人口研究（中国ムスリムの現在の人口研究）」、『済南穆斯林（済南ムスリム）』2010年第2期。
- 4) 中国伊斯蘭教協會編、『中国伊斯蘭教簡志（中国イスラーム簡志）』、宗教文化出版社、2011年4月、第159頁。
- 5) 中国伊斯蘭教協會編、『中国伊斯蘭教簡志（中国イスラーム簡志）』、宗教文化出版社、2011年4月、第82-85頁。
- 6) 王宇潔「2008年中国伊斯蘭教概況及对穆斯林流動問題的分析（2008年中国イスラームの概況およびムスリムの流動問題の分析）」、金沢・邱永輝主編『中国宗教報告』（2009年）、社会科学文献出版社、2009年、第76頁。
- 7) 季芳桐「東部城市流動穆斯林人口の結構特征与就業狀況研究——以天津、上海、南京、深圳四城市為考察点（東部都市流動ムスリム人口の構成特徴と就業狀況の研究——天津、上海、南京、深圳の4都市を調査点として）」、『西北第二民族学院学報（哲学社会科学版）』、2008年第4期。